

Daily Activities of Housewives in the Suberbs of Nagoya

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kamiya, Hiroo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001052

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



大都市郊外における主婦の日常活動

—尾張旭市の例—

神谷 浩夫*

I はじめに

制約を考慮した移動行動を理解するために試みられているアプローチには、大別して二つの方向があると思われる。一つは、時間地理学の制約概念（特に結合の制約と権威の制約）を主に用い、移動行動の説明を試みるものである。例えば、Pred and Palm¹⁾は、子供を持つ仮想的な4人の女性を取り上げ、1日の余暇時間を利用して社会参加しようとする際に女性にのしかかる制約を明らかにしている。第2の方向は Tivers²⁾に代表され、必ずしも時間地理学の制約概念だけにとらわれず、もっと幅広い制約を考察しようとするものである。彼女は、ロンドン市内の南部に住む幼い子供をもつ母親400人の調査を行い、女性の役割に関する社会的規範は時間地理学の制約や権威の制約だけでは理解が困難なこと、こうした女性たちはフルタイム働く女性に比べてさほど大きな時間的制約があるわけではないことから、時間地理学の制約概念よりもより幅広い「社会的制約」と言う概念を用いて活動の分析を試みている。

筆者の立場も Tivers のそれに近い。前稿では³⁾、時間地理学の制約は、ある与えられた状況が既に明らかとなっている場合には活動の分析に有効であるが、現実にはどのような活動が行われているか明らかにしようとする場合には困難が生じることを指摘した。本稿では、前稿に引続き、プロジェ

クト概念を用いて大都市の主婦の日常の活動の組み立てを明らかにすることを目的とする。

II 対象地域の概観とデータ収集方法

分析に用いたデータは、名古屋市東部に隣接する尾張旭市瑞鳳小学校区に住む37人の主婦を対象とする、4週間の時間利用と外出行動に関する記録からなる。調査方法は、前稿で行った方法と同じであり、調査は、1981年11月から12月にかけて実施した。

前稿で報告したサンプルと今回のサンプルとを比較すると、住居年数がやや短く、ライフサイクルの段階が早く（子供が幼い）、ほぼ全世帯が車を保有しており、パートタイマー（内職を含む）として働いている主婦の割合が高い、といった属性の違いがみられる。これらの違いは、都市内の古い住宅地と郊外の新しい住宅地という差にほぼ対応すると考えられる。こうしたサンプルの違い、居住環境の違いを考慮しながら、主婦の日常活動がどのように組み立てられているかを分析し、その中で生起するトリップの状況を明らかにする。分析の手順も、比較という点から、前稿と同じ方法を踏襲する。

記録用紙に記入されているデータを分析に用いるために、Szalai⁴⁾に従いコード化を行った。実際の分析では、3カテゴリーおよび、9カテゴリーの活動分類を用いた。得られたデータのうち、外泊した日、記入漏れのあった日、病気で1日中寝

* 日本学術振興会特別研究員（名古屋大）

表 1 時間利用の種類の平均

	n	在宅労働	外出労働	睡眠	在宅余暇	外出余暇
A型	46	204(14)	68(5)	532(37)	174(12)	462(32)
B型	146	256(18)	370(26)	484(34)	290(20)	40(3)
C型	468	454(32)	63(4)	484(34)	371(26)	68(5)
D型	191	339(24)	70(5)	539(37)	302(21)	190(13)
E型	35	252(17)	35(2)	533(37)	592(41)	28(2)
F型	123	707(49)	44(3)	424(29)	230(16)	36(2)
G型	2	590(41)	33(2)	165(11)	105(7)	548(45)

*単位：分，かつこ内は％（アンケート調査による）

ていた日を除き，最終的にのべ1011日分の記録を対象として分析を行った。

Ⅲ 1日の時間利用の種類

主婦の持つ1日の時間利用の種類を帰納的に求めるために，3カテゴリーの時間利用の分類（労働・睡眠・余暇）に加えて，活動が行われる場所を自宅とそれ以外の外出先に分けた。その結果，5つの活動（在宅労働・外出労働・睡眠・在宅余暇・外出余暇）に配分されている時間数が各ケースについて得られた。次に，これらの5つの活動時間数を変数とするデータに対し，クラスター分析を施した。クラスターの数7とし，便宜上A～G型と名付けた。

これらのクラスターの時間配分の平均値を示したのが表1である。この表に示されている時間配分の7種類の特徴は次のようである。A型とD型は，外出余暇時間が大きいのが特徴である。特にA型の外出余暇時間は7時間を超える。B型は，外出労働時間が大きい。C型は，ケース数が468と多く，在宅労働時間と在宅余暇時間が大きい。E型は，在宅余暇時間が大きい点が他の型とは大きく異なっており，F型は，在宅労働時間が飛び抜けて大きい。G型は外出余暇時間が大きい点はA型と類似しているが，A型と比べて在宅労働時間がずっと大きく，反対に，睡眠時間が小さい。ただ，ケース数は2と少なく，調査用紙でこの2ケ

ースを詳しく点検すると，徹夜で近所の家に麻雀をしに出かけた日であったことが判明した。それゆえ，G型は2ケースしか見られないこともあり，以下の分析では省くことにする。

残りの6類型について，前稿で明らかとなった類型と比較してみると，6つの類型にほぼ対応する類型が名古屋市東区の場合にも存在していた。

表 2 個人別の時間利用類型の日数

No	就業 状態	A型	B型	C型	D型	E型	F型
1	N	2(2)	0	19(1)	4(2)	0	3
2	N	0	0	22(4)	6(1)	0	0
3	H	1	0	11(2)	11(3)	0	5
4	N	0	0	22(3)	2	1	1
6	H	1(1)	0	9(1)	2	3(2)	10
7	H	1(1)	1	9	2(2)	0	11
8	H	1(1)	1	13(3)	2(1)	0	11
9	P	0	8(1)	14(3)	6(1)	0	0
10	N	0	0	11(2)	5(2)	10	0
11	N	4(3)	0	14(1)	5(1)	5	0
12	N	2(1)	0	18(2)	6(2)	2	0
13	H	0	1	21(1)	4(3)	2(1)	0
14	N	1	0	15(1)	11(4)	0	1
15	H	0	0	13(1)	4(1)	1	6
17	H	8(4)	1	5	14(1)	0	0
18	H	1(1)	1	15(3)	10	0	0
19	H	4(2)	1	9	13(3)	0	1
20	H	1(1)	0	8	5(4)	0	14
21	P	1(1)	13	10(2)	1(1)	0	1
22	F	0	18(1)	6(3)	4(1)	0	0
23	H	1(1)	4(1)	16(2)	6(1)	1	0
24	H	0	0	12(3)	3(2)	0	13
25	N	1	0	13	14(5)	0	0
26	N	1(1)	0	10(3)	1(1)	0	16
27	N	0	0	23(3)	3(1)	1(1)	1
28	N	0	0	20(3)	7(2)	0	1
29	N	3(3)	2	15(1)	6(1)	0	0
30	N	1	0	22(4)	0	0	2
31	P	0	19	2(1)	7(4)	0	0
32	N	3(3)	1	16(1)	4(1)	0	4
33	N	0	0	19(1)	9(4)	0	0
34	P	2(1)	9	12(2)	4(1)	1(1)	0
35	P	0	21(2)	2(1)	1(1)	2	0
36	P	2(2)	19	0	4(3)	1	0
37	P	2(1)	7(2)	6	2(1)	1(1)	10
38	P	2(1)	19(1)	2(1)	1	4(2)	0
39	N	0	0	14(3)	2(1)	0	12(1)
計		46(31)	146(8)	468(52)	191(62)	35(8)	123(1)

*F：家族従業者，P：パートタイマー，H：内職，N：無職
かつこ内は日曜日のみの日数（アンケート調査による）

その対応関係を見るために、平均値の差の検定を行ってみると、各類型の時間利用の各カテゴリー⁵⁾の対には、有意な差がある場合もない場合もあり、いちがいに判断は下せない(表省略)。しかし、各類型の特徴的な時間配分のパターンは共通してみられる。例えば、A型やD型は外出余暇時間の大きいのが特徴であったが、これは、名古屋市東区の場合にも尾張旭市の場合にも認められる。有意な差が認められるカテゴリーのうちで特に差の大きいものは、F型の在宅労働時間・在宅余暇時間やD型の睡眠時間・外出余暇時間、A型の在宅余

暇時間・睡眠時間、C型の在宅労働時間、等である。これらの違いは、クラスター分析という帰納的な方法を用いたため、やむをえない。名古屋市東区の場合にはフルタイム働く人がサンプルに含まれていたのに対して、ここでのサンプルには含まれていないことや、内職に従事している人の割合が2つのサンプルでかなり異なっているといったサンプルの構成の違いがこうした差の原因と思われる。にも関わらず、非常に似通った時間配分のパターンをもつ類型が共通して認められた。それゆえ、各類型の時間配分の数字そのものはさら

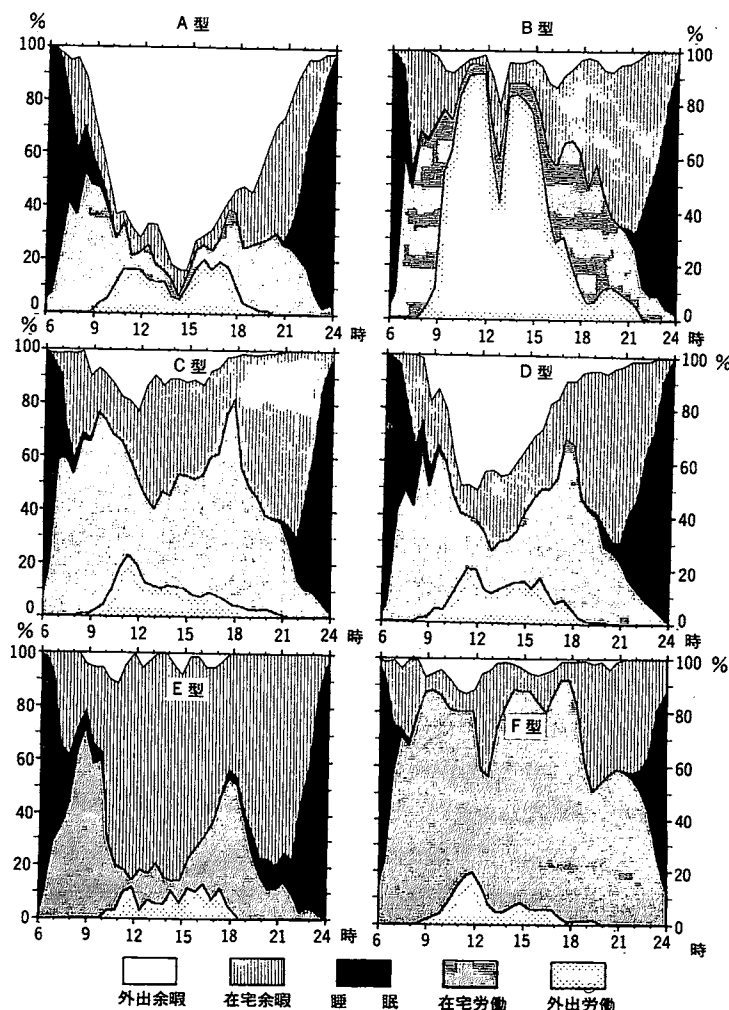


図1 活動の時間的推移 (アンケート調査による)

に検討を要するが、各活動への時間配分のパターンはかなり普遍的なものと考えて良いであろう。

こうした比較をさらに検討するため、表2を作成した。この表は、個人ごとに、28日間がどのような類型から構成されているかを示している。在宅労働時間が大きいF型は、内職の人に多くみられる。しかし、サンプル番号26や37・39といった無職の人やパートタイマーの人にも見られる。パートタイマーの人は、外出労働時間の大きいB型がしばしば出現するが、勤務時間の拘束がさほど大きくない場合には、その他の型も見られる。無職の人の場合、28日間に出現するタイプは様々である。ただ、E型とF型の中間に位置するC型が全サンプルの半分近くを占めていることもあって、C型の出現頻度が高くなっている。

図1は、時間帯別に5つの活動に従事している人の割合を、各類型ごとに示したものである。この図から、表1の数値にほぼ対応した時間の配分が読み取れる。ただし、F型を除いて、午前9時までと午後9時過ぎの自宅での活動のパターンは類似している。それゆえ、6つの類型の時間配分の違いは、おもに昼間の時間をどのように配分するかの差に起因する。特にA型では、昼間の余暇の外出が夕方を過ぎても継続することが多く、F型では、夜にも自宅で労働に従事している。

再び前稿の結果との比較を行うと、それぞれの時刻での活動の分布も、比較的良好に対応している。ただ、C型では外出労働時間が1日全体でみても少ないこともあり、ピークがはっきりしない。活動の時刻ごとの生起のパターンとしては、E型とF型の中間に位置する。

以上の考察をまとめると、主婦の1日の時間配分のプロジェクトとして、6類型が認められた。これらの類型は、前稿で認定した類型とほぼ対応する。ただし、統計的な検定を行ってみると必ずしも同一の母集団からのものとは言えなかった。

IV 1日の中での外出行動

次に、前章で認定した1日の時間配分の6類型について、各類型の1日の中で生じる外出行動とその前後の活動の構造を考察する。手順としては、まず、各類型毎にその1日の時間配分の中で生じるトリップを取り出し、その特徴について述べる。次に、トリップの前後の活動はどのようなになっているか検討する。最後に、トリップの目的地の空間的な分布を考察する。

表3 1日当たりのサイクル数

サイクル数	A型	B型	C型	D型	E型	F型	合計
0			46	3	12	24	85
1	13	28	131	45	12	44	273
2	19	43	143	60	10	40	315
3	5	44	95	46		14	204
4	5	16	41	23	1	1	87
5	1	15	10	8			34
6	3			5			8
7			1	1			2
8							
9			1				1
平均	2.37	2.64	1.99	2.47	1.03	1.38	2.09
合計	46	146	468	191	35	123	1009

(アンケート調査による)

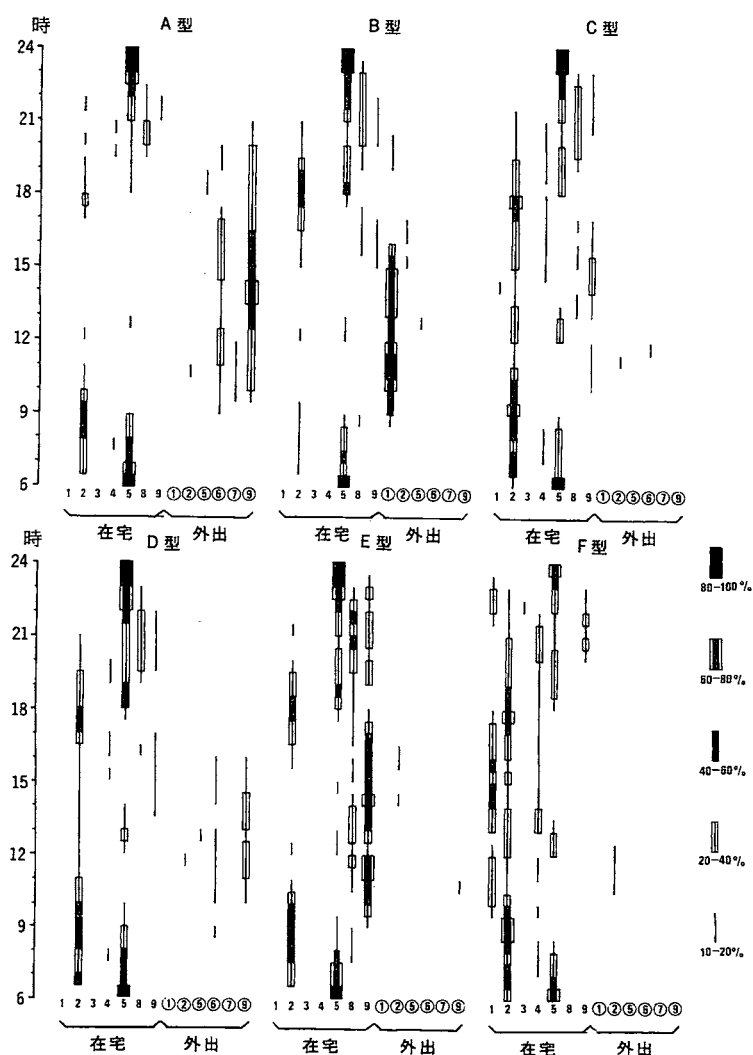
表4 1サイクル当たりトリップ数

トリップ数	A型	B型	C型	D型	E型	F型	合計
2	52	297	705	316	30	131	1531
3	22	62	154	83	5	29	355
4	16	19	51	44	1	7	138
5	8	6	14	21		3	52
6	5	1	5	7			18
7	2		2	1			5
8	3						3
9			1				1
10	1						1
平均	3.23	2.32	2.36	2.56	2.19	2.31	2.43
合計	106	385	932	472	36	170	2094

(アンケート調査による)

(1)トリップの諸特性 表3は、各類型別の1日当たりのサイクル数を示している。外出時間の大きいA型とB型では、サイクル数が0の日はなく、すべて1以上となっている。反対に、外出時間の小さいE型とF型では、サイクル数が0の日の割合が高く、D型もこれに近い。C型は、この二つのグループの中間的値をとる。全体でみると、1日当たりのサイクル数は、2の日が最も多く、次

いで1、3の順となっている。1人1日当たりの平均サイクル数は、2.09であり、前稿の1.88よりも若干高くなっている。逆に1日当たりのサイクル数が0の日の割合は、尾張旭市の事例の方が若干高い(5.3%に対して8.4%)。類型別にみると、B型が1日当たりの平均サイクル数が最も大きく、次いでD型、A型の順となっており、E型、F型が他の4つの型と比べて小さい。



※数字は1「労働」2「家事」3「その他家事」4「子供の世話」5「個人的用件」
6「仕事以外の移動」7「学習・参加」8「マスメディア」9「余暇」

図2 9カテゴリーの活動の時間的推移 (アンケート調査による)

トリップ数についても、表3と同様の表を作成した(表4)。全ての類型において、2トリップから成るサイクルが全体の過半数を占めている。6類型全体に占める多目的トリップの割合は、サイクル数で計算すれば26.9%、トリップ数では40.3%となっており、名古屋市東区の事例よりも少し低くなっている。多目的率をみると、A型で、多目的トリップの占める割合が最も高く、次いでD型となっている。この結果もまた、前稿で明らかとなった点、すなわち、余暇の外出時間が大きくなると多目的トリップが起きやすくなるという点と一致する。

この点をさらに詳しく検討するために、外出先での活動が単一目的のトリップの中で行われるか、多目的トリップの中で行われるかを調べてみるこ

表5 単一目的・多目的トリップでの活動

	単一目的トリップ			多目的トリップ		
	仕事	その他 の労働	余暇	仕事	その他 の労働	余暇
A型	0.4	8.3	12.8	0.0	30.6	47.9
B型	25.0	28.0	5.5	13.6	20.5	7.3
C型	1.7	38.1	15.9	0.6	32.7	11.0
D型	0.9	23.7	18.0	0.7	29.7	26.9
E型	0.0	48.8	20.9	0.0	18.6	11.6
F型	0.0	41.9	17.1	0.5	34.2	6.3

*単位：各類型の外出時の活動の総生起回数に対する割合（%）
（アンケート調査による）

ととする。表5は、3カテゴリーの活動分類のうちの労働を2つに分けて、仕事とその他の労働とし、これに余暇を加えた3分類の活動の生起回数の割合を各類型ごとにみたものである。この表でも、A型とD型の余暇の外出が多目的トリップの中で生じることが確かめられる。しかし、全体的に多目的トリップの割合が名古屋市東区の事例よりも低いこともあって、その他の労働は多目的トリップの中で行われたり、単一目的トリップの中で行われたりする。

(2)外出行動と前後の活動 ここでは、上述のト

リップ数の特徴を、トリップが発生する前後の状況と関連づけようと試みる。活動を詳しくみるために9カテゴリーの活動分類を用い、活動が行われる位置を在宅と外出の二つに分ける。

図2は、各類型ごとにそれぞれの活動に従事している人の割合が10%以上の活動を30分ごとに調べ、これを6時から24時まで図化したものである。A型は、D型とならんで外出余暇時間が大きいのが、D型よりも外出の「余暇」が夜遅くまで継続するため、18時以降の在宅の「家事」の割合がかなり低い。それゆえ、夜の在宅の活動は全般に短時間で割合も低い。しかし、朝の在宅の「家事」のピークは明瞭に認められる。B型では、外出の「労働」が終わった16時頃に外出の「家事」が行われている。C型は、図の中では、昼前に弱い外出のピークが現れているのみである。しかし、外出の目的が「家事」や「子供の世話」「余暇」など多岐であり、外出の割合は、10時30分から16時まで20%を越えている。在宅の活動は、午前中はおもに「家事」、午後に「余暇」の割合が20%を越える。外出の時刻と「余暇」の時刻は、ほぼ平行している。D型では、時間帯別の活動分布が比較的明瞭で、午前には、在宅の「家事」から「余暇」の外出への移行が認められ、夕方には、在宅の「余暇」や「子供の世話」をはさんで「余暇」の外出から在宅の「家事」への移行がみられる。E型では、「家事」の外出が14時から16時30分にかけて、「余暇」の外出が11時頃みられるのみで、昼間は在宅の「余暇」の割合が非常に高い。また、他の型に比べ、夜遅い時刻で「マスメディア」・「余暇」の割合も高い。F型にみられる外出は、10時30分から13時にかけての「家事」のみである。名古屋市東区のサンプルに比べて内職の人が多いことから、在宅の「仕事」に従事する割合が10時から16時の間で高い。特に、14時から16時の間では40%をこえる。

表6 活動ごとの外出先

		仕 事	その他の仕事	余 暇
A型	自地区	1(0.4)	33(13.6)	41(16.9)
	都心地区	0(0)	5(2.1)	3(1.2)
	その他地区	0(0)	56(23.0)	104(42.8)
B型	自地区	127(25.0)	147(29.0)	34(6.7)
	都心地区	0(0)	8(1.6)	0(0)
	その他地区	69(13.6)	91(17.9)	31(6.1)
C型	自地区	15(1.2)	541(42.7)	211(16.7)
	都心地区	0(0)	9(0.7)	1(0.1)
	その他地区	14(1.1)	344(27.2)	132(10.4)
D型	自地区	9(1.2)	241(32.6)	165(22.3)
	都心地区	0(0)	45(6.1)	33(4.5)
	その他地区	3(0.4)	135(14.6)	246(18.3)
E型	自地区	0(0)	19(44.2)	12(27.9)
	都心地区	0(0)	1(2.3)	0(0)
	その他地区	0(0)	9(20.9)	2(4.7)
F型	自地区	0(0)	101(45.5)	32(14.4)
	都心地区	0(0)	11(5.0)	18(8.1)
	その他地区	1(0.5)	57(25.7)	2(0.9)

* かつこ内は各類型の合計に対する％（アンケート調査による）

(3)外出先の位置 次に、外出先で行われる活動を、その位置に注目して考察する。表6は、活動を表5と同様に3分類して、各活動がどこで行われているか調べたものである。外出先の位置は、地図上に1km×1kmのメッシュをかけ、そのコードを与えた。そして、調査対象者が居住する3つのメッシュを「自地区」、名古屋駅から栄にかけての7つのメッシュを「都心地区」、これら以外の地点を「その他地区」という3つに分類した。

外出余暇時間の大きいA型とD型では、余暇の活動はその他地区でかなり行われており、特にA型でその割合が高い。その他の仕事についても、A型では、その他地区で活動に従事する割合が自地区で従事する場合よりも高くなっており、これは、D型にも他の型にも見られない。外出労働時間の大きいB型では、サンプルにフルタイム働く人がいないため、仕事はおもに自地区で行われている。むしろ、その他の仕事や余暇の活動の方が、

自地区以外で行われる割合が高い。C・E・F型の3つの型は全般的に類似していて、その他の仕事や余暇の活動の大部分が自地区で行われる。また、その他の仕事は、その他地区で20%前後行われている。ただ、余暇に関しては、C型ではその他地区で10%ほど、F型では都心地区で10%近くが行われている。

名古屋市東区の事例と比較してみると、全般に都心や自地区で活動が行われる割合が低い。逆に、その他の地区で行われる割合は高くなっている。名古屋市東区の事例地区が都心に近く商業中心に隣接しているのに対して、この地区は都心からの距離のみでなく郊外の商業中心からもやや離れていることから、このことは説明できるだろう。それゆえ、名古屋市東区の事例でみられた各類型間の差は、さほど目だたなくなっている。例えば、東区の事例ではE型とF型の外出時の全活動の85%以上が自地区で行われていたのに対して、尾張旭市の事例ではその割合が、E型では70%近く、F型では60%以下にまで低下し、B・C・D型との差がほとんどなくなっている。

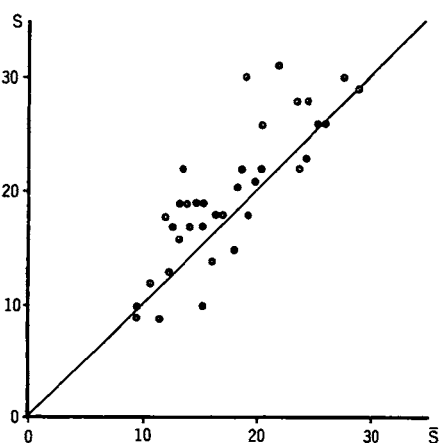


図3 時間利用類型の曜日ごとの規則性
（アンケート調査による）

V 4週間の中での活動

これまででは、1日を単位としてその時間配分の特徴と1日の中で生じる外出行動を考察してきた。ここでは、こうした1日単位の活動が4週間の中でどのように構成されているかを検討する。

まず最初に、個人ごとの4週間を通じた6つの時間利用類型の出現に、曜日ごとの規則性があるかどうかを検討してみる。図3は、前稿と同様の方法によって、4週間の時間利用類型の出現の曜日ごとの規則性を、シミュレーションによって再現した場合と、実際の記録にみられたものを比較したものである。対角線の左上に分布する点が多いことから、4週間を通じた時間利用には、曜日ごとの規則性がみられると考えられる。

表7 就業状態別の6類型の日数

	A型	B型	C型	D型	E型	F型
パート	9(4.0)	115(51.3)	48(21.4)	26(11.6)	9(4.0)	17(7.6)
内職	19(6.0)	10(3.1)	141(44.3)	76(23.9)	7(2.2)	65(20.4)
無職	18(4.1)	3(0.7)	273(62.2)	85(19.4)	19(4.3)	41(9.3)

*かっこ内は％(アンケート調査による)

次に、上でみた曜日ごとの規則性以外には4週間を通じた時間利用類型の出現に特徴がないか否かをさらに検討してみる。表7は、表2の時間利用類型の出現日数を就業状態別に集計し直したものである。就業状態は、パートタイマー、内職、無職の3つに分け、家族従業者は1人しかいないため省いた。

パートタイマーは、外出労働時間の大きいB型の日数が多く、外出余暇時間の比較的大きい2つの型、A型とD型の日数が少ない。内職の人は、F型の日数の占める割合が高いのは当然としても、A型やD型の日数の占める割合は無職の人よりも高い。無職の人は、C型の日数の割合が高く、その他の型は比較的低い割合となっている。

これらの点から、外出余暇時間の大きいD型や

A型のタイプのプロジェクトを実行する可能性が最も高いのは、内職に従事している人であり、無職の人でないことが注目される。この要因として、家事の時間的分断性や、幼児のいることによるモビリティの低下などが考えられるが、家族構成や所得水準なども考慮しなければならないため、今後の検討課題としたい。

VI むすび

本稿では、主婦の1日の時間利用と1日の中で生じる外出行動、そして、4週間を通じた活動の考察を行った。その結果、前稿で認定した1日の時間配分の6つの型が大都市の郊外である尾張旭市の事例でも認められた。時間配分の特徴は、名古屋市東区の場合と尾張旭市の場合ともかなり共通していた。これらの6類型の特徴を模式図で示したのが図4である。

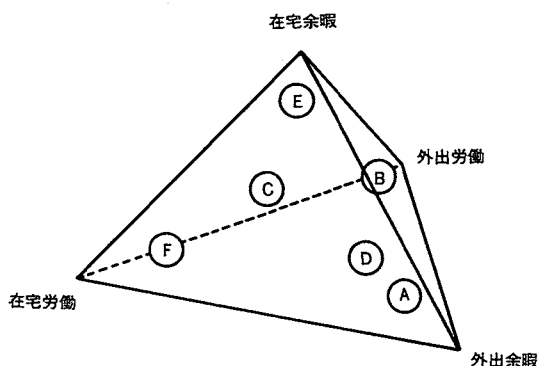


図4 1日単位の時間配分の模式図

図では、睡眠時間はほぼ毎日一定であるとみなし省いてある。1日の時間配分は、在宅労働、外出労働、在宅余暇、外出労働の4つの頂点を持つ正四面体の中に位置づけることができる。例えば、ここで認定された6類型のうちのA型は外出余暇時間の非常に大きいタイプであったため、外出余暇の極近く的位置に描かれ、D型はこれよりはやや内側の位置に描かれる。社会全体に一般的にみられる主婦の1日の時間利用のプロジェクトは、

このように模式的に示され得る6つのタイプに分けられるだろう。そして、労働市場に参加することは、長期的にみて、B型のプロジェクトを行うことになる。さらに、従来の日本型慣行雇用体系の下では、B型のプロジェクトを選択することは、その他のプロジェクトを遂行することが非常に困難となることを意味していた。しかし、高度成長期以降、労働市場が逼迫し、新しいプロジェクトとして、パートタイマー等の短時間就業雇用が社会に広く普及し、B型に近いD型の時間配分がひろがった。これには、家事の機械化や世帯規模の縮小なども影響している。D型のプロジェクトは、他の型と（長期的にみて）両立が可能であり、これが、女子労働力率を高めることにつながった。

一方、従来の都市の主婦に広くみられたのは、C・E・F型のプロジェクトである（実際に存在していたのか、それとも、社会的規範としてのみ存在していたかは不明であるが）。家事労働の機械化や市場化の進展、家族規模の縮小、教育水準の上昇（主婦自身と子供の両方）は家事労働時間の削減と、余暇時間の増大をもたらした。また、社会的にも、余暇産業の発達により、カルチャーセンターやスポーツ施設などの余暇機会の供給が増大した。こうした結果、A・D型のプロジェクトが社会に拡大したと考えられる。

しかし、家事労働の市場経済化が進展したといっても、育児や病人の介護といった市場経済にのりにくい家事は依然として主婦の手に委ねられている。それゆえ、ここで観察されたC型やE・F型の時間利用のプロジェクトを、自発的なものか、

Tiversのいう「社会的制約」により主婦に課せられたものかは、判断することができない。これらの点は、今後の取り組むべき課題として残されている。

本稿は、1987年度人文地理学会大会にて発表した内容に加筆訂正を加えたものである。講義を通してご指導を頂いた松井貞雄先生に本稿を献呈致します。

注

- 1) Pred, A. and Palm, R.(1987):The Status of American Women; A Time-Geographic View,in Lanegram,D.A. and Palm,R. eds. Invitation to Geography, McGraw Hill, 99-109
- 2) Tivers,J.(1984):Women Attached;The Daily Lives of Women with Young Children,Croom Helm
- 3) 神谷浩夫(1987):名古屋市における主婦の日常活動-時間利用と外出行動との関連を中心に-, 人文地理, 39-6, 505-521
- 4) Szalai, A. et al. eds.(1972):The Use of Time, Mouton
- 5) t検定を行った結果、各類型の平均値の対において1%の有意水準で差が認められたのは以下のカテゴリーであった。A型:睡眠・在宅余暇, B型:在宅労働・外出労働・外出余暇, C型:在宅労働・外出労働, D型:睡眠・外出余暇, E型:睡眠・外出余暇, F型:在宅余暇・外出余暇
- 6) 雇用職業総合研究所編(1987):女子労働の新時代-キャッチ・アップを超えて-, 東大出版会